

常葉大学教育学部新入生における自己意識の変化

吉田 哲也, 伊東 明子

Changes in Self-Awareness Among First-Year Students in
Tokoha University's Faculty of Education.

Tetsuya YOSHIDA, Akiko ITO

2014年11月26日受理

【問題と目的】

文部科学省（2014）による平成24年度の大学中退者・休学者状況の調査によると、中退者の4.4%、休学者の3.0%が「学校生活不適應」によって中退・休学している。全体の割合からみると必ずしも大きな割合を占めているわけではないが、国立・公立・私立別の割合を比較すると、学校生活不適應を理由とする私立大学学部生の中退者率（5.1%）・休学者率（3.9%）は全体の平均より高く、国立・公立と比較して割合が大きい。また、中退・休学理由としてあげられている選択肢の中で、「学校生活不適應」の問題は、「学業不振」と並んで大学における学生支援（学生生活支援）体制や学内における学生を取り巻く環境整備、学生に対する働きかけが有効に機能することが期待できる要因であり、一人でも多くの学生が大学生活に適應するよう支援することが必要であることは言うまでもないだろう。

一方、本学学生における大学適應に関わる要因は何か、また関係する要因モデルについては明確な解は得られていない。仮にスクリーニングによって不適應傾向の学生に早い段階から支援を行うことを企図するとしても、なにを指標とすればよいかは現時点ではよくわからない。そこで、本研究ではその指標として自己意識に焦点をあてることとする。たとえば松島（2012）は対人的自己効力感などと大学適應感の関連を検討しているが、いかなる自己意識が適應と関連しているかはいまだ十分とはいえない。加えて、適應傾向を調査するためには比較的継時的な調査が必要と思われる。これについて脇本（2013）も、大学適應に関して継時的検討が必要であることを主張している。

このことについて、大学1年次の自己意識・自己認識の変化に関して、仲野・桜本（2009）が自己肯定感・自己受容・自我同一性の各概念における学期当初と学期終了時の変化を検討し、それぞれ平均値の上昇があったことを明らかにしている。ただ、この研究では調査実施時期が後期授業期間に限られており、大学に入学して間もない前期授業期間における検討は行われていない。

そこで本研究では、大学入学して間もない新入生の段階からの自己意識に焦点をあて、その変化を継時的に検討することを目的とする。そして、自己意識と関連すると思われる諸要因を探索的に検討することで、大学新入生の大学生活への適応のプロセスを探ることを目指す。

本研究では、自己意識として二つの概念を取り上げる。第一に仮想的有能感（他者軽視）である。仮想的有能感とは、「自己の直接的なポジティブ体験に関係なく、他者の能力を批判的に評価・軽視する傾向に付随して習慣的に生じる有能さの感覚」と定義される（速水，2010）。この概念は専ら青年期の心理的問題として取り上げられてきた概念であり、いくつかの特徴が挙げられる。第一に、この感覚は自身を他者より相対的に高く評価することによって生じるというよりもむしろ、他者を低く評価する、すなわち下方比較することで生じると仮定されている点である（速水，2006）。このことから、ネガティブな自己評価と仮想的有能感との関係が示唆され、実際に速水は一連の研究で自尊感情と仮想的有能感を組み合わせ、自尊感情が低く仮想的有能感が高い者が真の仮想的有能感を持つ者であると仮定している。第二に、その際に想定される他者とは基本的に不特定多数の他者であるとされる点である。ただ同時に速水は、日常的に接点の多い友人等の他者に対しても仮想的有能感が転移する可能性があるとも述べている。また高木・丹羽・速水（2008）は、仮想的有能感の強さの違いにおける3か月間の対人感情の変化の違いを検討し、関係の初期段階で他者に対し否定的感情を抱いた仮想的有能感の高い者は、3か月後にその否定的感情が強くなったことを示唆している。いずれにしても重要なのは、仮想的有能感と友人関係を含めた他者との人間関係には関連性があることが主張されているということである。したがって、たとえばサークル活動やアルバイト、ボランティア活動といった他者とのかかわりの違い、あるいは他者とのコミュニケーションの頻度によって、仮想的有能感の傾向に違いがみられる可能性が考えられる。

本研究で取り上げる第二の概念は、自己肯定感である。自己肯定感については多くの研究があるが、本研究では田中（2005）の「自己に対して肯定的で、好ましく思うような態度や感情」という定義に基づく自己肯定感を取り上げる。先述したように、仮想的有能感とは自尊感情と関連させて述べられることが多いが、田中（2005）が主張するように、自尊感情と自己肯定感は近接する概念であり、自己肯定感とは自分自身に対する肯定的な態度・感情により焦点をあてた概念である

と考えられている。神原・遠藤（2013）によると、基本的に自己肯定感は維持するよう動機づけられているものの、いくつかの要因によって変容・変化する可能性があることを示唆している。梅山・撫尾（2012）は、小学生に対して社会的スキルを高める協同学習を行った結果、社会的スキルの低い児童の自己肯定感に変化がみられたことを報告している。また今泉・内山・若松・大木（2007）は、自己肯定感を高めることを目的とした心理的ワークプログラム実施前後で自己肯定感に若干の変化がみられたことを報告している。このように自己肯定感に変化・変容する可能性はあるものの、上記の研究はいずれも自己肯定感を変化させることを意図した働きかけによるものであり、大学生活や日常生活における通常の他者との関わりによる自己肯定感の変容・変化を検討したものではない。また、中下・岩井・大戸・佐藤・久保田・上原・宮崎（2012）のように、自己肯定感の変容を企図した働きかけをおこなっても、必ずしも統計的に有意な自己肯定感の変化・変容が全ての対象者にみられるとは限らない。神原・遠藤（2013）が述べるように、基本的に自己肯定感は維持される傾向があるとすれば、大学生活や日常生活での他者との関わりの違いで自己肯定感に大きな変化は見られない可能性は考えられる。逆に言えば、もし自己肯定感に他の学生と比較して変化がみられた場合、当該の学生は大学生活や日常生活での他者との関わりの中で何らかの原因により自己肯定感に影響があらわれる可能性が考えられる。

以上より本研究では、入学当初の入学意思、サークル活動やアルバイト・ボランティア活動といった他者とのかかわりの違い、あるいは他者とのコミュニケーションの頻度の違いが仮想的有能感や自己肯定感に影響を与えるかを継時的に検討することを目的に調査を行う。

【方法】

調査協力者 常葉大学教育学部に在籍している1年生であり、2014年度前期教職必修科目教育心理学または選択科目心理学を受講している学生に依頼した。調査実施時に口頭と文書で説明合意を得ており、協力に合意したもののうち、欠損データのあるもの、回答内容に明らかな疑いが認められ筆者2名の合議により除外が合意されたもの、第1回または第2回調査で合意が得られなかったり欠席していたりしたものを除く243名（男性120名、女性123名）を分析対象とした。平均年齢は第1回調査時点で18.15歳（SD: 0.53）、第2回調査時点で18.40歳（SD: 0.65）だった。表1に学科・性別ごとの分析対象者数を示す。

調査時期 第1回調査は2014年4月23日～25日に実施した。第2回調査は2014年7月23日～25日に実施した。

調査方法 質問紙は個別自記入形式であり、上記授業時間内に筆者によって集合調査形式で実施した。実施時間は説明を含め15分～20分程度だった。

質問紙の構成

第1回調査

フェイスシート（年齢・性別・学籍番号）のほか、以下の項目で構成した。

- (1)入学意思：本学に入学したかった気持ちの強さを1（入学したくなかった）～10（入学したかった）の10段階で回答を求めた。
- (2)サークル・アルバイト・ボランティア活動の有無：サークルについては入部したまたは入部することを決めているか、そうでないかを、アルバイトおよびボランティア活動については、しているまたはする予定があるか、そうでないかを、それぞれ2件法で回答を求めた。
- (3)他者とのコミュニケーション頻度：「家族（親兄弟誰か一人でも可）」、「学校や塾の先生（以下、先生）」、「現在の同級生（以下、同級生）」、「友人」、「先輩」、「自分の居住する地域の人（以下、地域）」、「アルバイトやボランティア先の年上の人（以下、年上）」を対象とし、各々との間でのコミュニケーション頻度（直接的なコミュニケーションのほか、電話、メールやSNS等のインターネットを介したコミュニケーションも含めた）を求めた。回答は1（まったくしない）～5（よくする）までの5件法で求めたが、「年上」については、アルバイト・ボランティアをおこなっていない調査協力者がいる可能性を考慮し、0（やっていない）、1（まったくしない）～5（よくする）までの6件法で回答を求めた。
- (4)仮想的有能感（他者軽視）尺度：速水（2006）の仮想的有能感尺度第二版11項目に対し、1（まったく思わない）～5（よく思う）までの5件法で回答を求めた。尺度項目を表2に示す。
- (5)自己肯定感尺度：田中（2005）の自己肯定尺度 ver.2 8項目に対し、1（まったくあてはまらない）～4（よくあてはまる）までの4件法で回答を求めた。尺度項目を表3に示す。なお、尺度項目のうち項目番号2、5、6、7は逆転項目のため、分析にあたっては逆転項目の処理を行った後得点化を行った。

第2回調査

フェイスシートのほか、以下の項目で構成した。

- (1)サークル・アルバイト・ボランティア活動の頻度：各々その個数（活動団体数またはアルバイト先数）と、一か月あたりの平均活動時間（複数の団体あるいはアルバイト先がある場合、各々の平均活動時間を合計したもの）について回答を求めた。
- (2)他者とのコミュニケーション頻度、(3)仮想的有能感（他者軽視）尺度、(4)自己肯定感尺度は第1回調査と同じ尺度を用いた。

表 1 学科・性別ごとの分析対象者数

学科	男性	女性	計
初等教育課程	69	47	116
生涯学習学科	40	32	72
心理教育学科	11	44	55

表 2 仮想的有能感（他者軽視）尺度の尺度項目

1	自分の周りには気のきかない人が多い。
2	他の人の仕事を見ていると、手際が悪いと感じる。
3	話し合いの場で、無意味な発言をする人が多い。
4	知識や教養がないのに偉そうにしている人が多い。
5	他の人に対して、なぜこんな簡単なことがわからないのだろうと感じる。
6	自分の代わりに大切な役目をまかせられるような有能な人は私の周りに少ない。
7	他の人を見ていて「ダメな人だ」と思うことが多い。
8	自分の意見が聞き入れてもらえなかった時、相手の理解力が足りないと感じる。
9	今の日本を動かしている人の多くは、たいした人間ではない。
10	世の中には、努力しなくても偉くなる人が少なくない。
11	世の中には、常識のない人が多すぎる。

表 3 自己肯定感尺度の尺度項目

1	私は、自分ことを大切だと感じる。
2	私は、時々、死んでしまった方がましだと感じる。
3	私は、いくつかの長所を持っている。
4	私は、人並み程度には物事ができる。
5	私は、後悔ばかりをしている。
6	私は、何をやってもうまくできない。
7	私は、自分のことが好きになれない。
8	私は、物事を前向きに考える方だ。

【結果と考察】

1. 仮想的有能感（他者軽視）尺度および自己肯定感尺度の内的妥当性の検討
 仮想的有能感（他者軽視）尺度・自己肯定感尺度とも各々の作成者を中心として研究が数多く存在し、尺度自体の有効性は確認されているが、念のため本研究においても内的妥当性の検討を行った。

まず、仮想的有能感（他者軽視）尺度について、第1回調査・第2回調査それぞれで確認の因子分析を行った。先行研究に従い1因子構造を仮定し分析したところ、第1回調査ではGFI=0.94, AGFI=0.90, RMSEA=0.06であり、第2回調査ではGFI=0.90, AGFI=0.86, RMSEA=0.09であった。また α 係数を算出したところ、第1回調査では0.83、第2回調査では0.86であった。以上の結果から、仮想的有能感（他者軽視）尺度については第2回調査のAGFI・RMSEAの値がやや低いものの、概ね先行研究の通り1因子構造が妥当であると判断し、以降の

分析を行った。

次に、自己肯定感尺度について、第1回調査・第2回調査それぞれで確認的因子分析を行った。先行研究に従い1因子構造を仮定し分析したところ、第1回調査ではGFI=0.93, AGFI=0.88, RMSEA=0.11であり、第2回調査ではGFI=0.89, AGFI=0.81, RMSEA=0.14であった。また α 係数を算出したところ、第1回調査では0.83、第2回調査では0.84であった。以上の結果から、特に第2回調査において内的妥当性がやや低いことが示唆されたが、今回は先行研究の通り1因子構造で以降の分析を行うこととした。

2. 第1回調査と第2回調査にかけての各指標の変化についての検討

2-1. 調査協力者全員の分析

(1)仮想的有能感尺度・自己肯定感尺度の検討

2回の調査における調査協力者全員の仮想的有能感および自己肯定感の平均とSDを表4に示した。各尺度についてそれぞれ時期(4月、7月)を要因とした1要因の分散分析をおこなった。仮想的有能感においては1%水準で有意な主効果がみられ、7月の得点が4月よりも高かった($F_{[1,242]}=25.06$, $p<0.01$)。自己肯定感については7月にかけて得点が低下する傾向がみられた($F_{[1,242]}=2.91$, $p<0.10$)。

(2)コミュニケーション頻度の検討

2回の調査における調査協力者全員のコミュニケーション頻度の平均とSDを表5に示した。コミュニケーションの各対象について、それぞれ時期(4月、7月)を要因とした1要因の分散分析をおこなった結果、「家族」($F_{[1,242]}=7.05$, $p<0.01$)、「先生」($F_{[1,242]}=8.51$, $p<0.01$)、「地域」($F_{[1,242]}=10.53$, $p<0.01$)の3対象については4月から7月にかけてコミュニケーション頻度が有意に減少していることが示された。反対に「同級生」($F_{[1,242]}=4.08$, $p<0.05$)、「先輩」($F_{[1,242]}=6.01$, $p<0.01$)、「年上」($F_{[1,242]}=25.00$, $p<0.01$)は4月から7月にかけてコミュニケーション頻度が有意に増加していることが示された。なお、「年上」については「アルバイト・ボランティアをおこなっていない」と回答した者を「非体験者」とし、その人数について直接確率計算を用いて検討した結果7月にかけて有意に減少していることが示された($p<0.01$)。

7対象のコミュニケーション頻度を合計した得点、年齢が上である4対象(先生、先輩、地域、年上)に限ってコミュニケーション頻度を合計した得点についても同様に分散分析をおこなったが、いずれも有意な時期の主効果はみられなかった。

表 4 各時期における仮想的有能感・自己肯定感の得点 (SD)

	4月	7月	有意性
仮想的有能感	26.83 (6.73)	28.60 (7.50)	4月<7月**
自己肯定感	22.00 (4.03)	21.74 (4.24)	4月>7月†

** $p<0.01$, † $p<0.10$

2-2. 男女の比較

(1) 仮想的有能感尺度・自己肯定感尺度の検討

2回の調査における仮想的有能感、自己肯定感の平均とSDを男女別に示したものが表6である。各尺度について、それぞれ性(男、女)と時期(4月、7月)を要因とした2要因の分散分析をおこなった。仮想的有能感においては性の主効果 ($F_{[1,241]}=9.77, p<0.01$) と時期の主効果 ($F_{[1,241]}=24.92, p<0.01$) がそれぞれ1%水準で有意であり、女子よりも男子の方が高いこと、7月の得点が4月よりも高くなっていることが示された。自己肯定感について時期の主効果のみに有意な傾向がみられ ($F_{[1,242]}=2.87, p<0.10$)、7月にかけて低くなっていく傾向がみられた。

(2) コミュニケーション頻度の検討

2回の調査における男女別のコミュニケーション頻度の平均とSDを表7に示した。コミュニケーションの各対象について、それぞれ性(男、女)と時期(4月、7月)を要因とした2要因の分散分析をおこなった。その結果、「家族」は性の主効果 ($F_{[1,241]}=16.63, p<0.01$) と時期の主効果 ($F_{[1,241]}=7.08, p<0.01$) がそれぞれ1%水準で有意であり、男子よりも女子の方が高いこと、7月にかけて低くなっていることが示された。「先生」は性と時期の交互作用が有意な傾向にあり ($F_{[1,242]}=3.59, p<0.10$)、単純主効果の検討をおこなった結果、男子の変化のみに有意な差がみられ ($p<0.01$)、7月にかけて頻度が減少していくことが示された。

その他の対象について時期の主効果のみが有意だったものは「同級生」 ($F_{[1,241]}=4.10, p<0.05$)、「先輩」 ($F_{[1,241]}=6.01, p<0.05$)、「地域」 ($F_{[1,241]}=10.48, p<0.01$)、「年上」 ($F_{[1,241]}=24.88, p<0.01$) であるが、「同級生」「先輩」「年上」の3対象はいずれも4月から7月にかけてコミュニケーション頻度が有意に増加しており、反対に「地域」は7月にかけて有意に減少していた。「友人」については有意な差はみられなかった。

また「年上」については「アルバイト・ボランティアをおこなっていない」と回答した者を「非体験者」とし、その人数について χ^2 検定を用いて検討したが、有意な人数の偏りはみられなかった。

次に、7対象のコミュニケーション頻度を合計した得点、年上の4対象(先

生、先輩、地域、年上)に限ってコミュニケーション頻度を合計した得点についても同様に分散分析をおこなったが、いずれも有意な差はみられなかった。

2-3. 課程・学科間の比較

(1)仮想的有能感尺度・自己肯定感尺度の検討

2回の調査における仮想的有能感、自己肯定感の平均とSDを課程・学科(以下、学科)ごとに示したものが表8である。各尺度について、学科(初等教育課程;以下、初等、生涯学習学科;以下、生涯、心理教育学科;以下、心理)と時期(4月、7月)を要因とした2要因の分散分析をそれぞれおこなった。仮想的有能感においては学科の主効果($F_{[2,240]}=5.43, p<0.01$)と時期の主効果($F_{[1,240]}=26.27, p<0.01$)にそれぞれ1%水準で有意な差がみられた。学科の主効果についてHolm法を用いた多重比較をおこなったところ、生涯がもっとも仮想的有能感が高く、次いで初等であり、最も低い得点を示したのが心理だった($MSe=84.04, p<0.05$)。時期に関しては7月にかけて高くなっていくことが示された。自己肯定感においては学科の主効果($F_{[2,240]}=3.24, p<0.05$)のみに有意差がみられ、Holm法による多重比較をおこなったところ、初等と生涯の得点が心理よりも高いことが示された($MSe=31.08, p<0.05$)。

(2)コミュニケーション頻度の検討

2回の調査における学科別のコミュニケーション頻度の平均とSDを表9に示した。コミュニケーションの各対象について学科(初等、生涯、心理)と時期(4月、7月)を要因とした2要因の分散分析をそれぞれおこなった結果、「家族」は学科と時期に有意な交互作用がみられた($F_{[2,240]}=3.70, p<0.05$)。そこで単純主効果の検定をおこなった結果、時期については4月における学科間に有意な差がみられ、Holm法による多重比較をおこなった結果、心理が初等と生涯よりも高かった($MSe=0.59, p<0.05$)。学科ごとにおける時期の変化については初等と生涯には有意な差はみられなかったが、心理のみに有意な差がみられ、7月にかけて有意に減少していることが示された。

「先輩」については学科の主効果($F_{[1,240]}=5.56, p<0.01$)と時期の主効果($F_{[1,240]}=5.36, p<0.05$)がそれぞれ有意であった。学科についてHolm法による多重比較をおこなった結果、生涯と初等の得点が心理よりも高かった($MSe=2.43, p<0.05$)。また時期については7月にかけて高くなっていることが示された。

その他の対象で時期の主効果のみが有意だったものは「先生」($F_{[1,240]}=7.16, p<0.01$)、「地域」($F_{[1,240]}=10.55, p<0.01$)、「年上」($F_{[1,240]}=18.85, p<0.01$)であり、「年上」は4月から7月にかけてコミュニケーション頻度が有意に減少していたが、反対に「先生」「地域」はいずれも7月にかけて有意に減少してい

ることが示された。「同級生」「友人」「については有意な差はみられなかった。また「年上」については「アルバイト・ボランティアをおこなっていない」と回答した者を「非体験者」とし、その人数について χ^2 検定を用いて検討したが、有意な人数の偏りはみられなかった。

次に、7対象のコミュニケーション頻度を合計した得点、年上の4対象（先生、先輩、地域、年上）に限ってコミュニケーション頻度を合計した得点についても同様に分散分析をおこなったが、いずれも有意な差はみられなかった。

2-4. 考察

以上の結果より、大学入学時に比べて3か月後の7月では仮想的有能感は上昇し、自己肯定感はやや低下する傾向が示された。また、コミュニケーションに関しては「家族」「先生」「地域」との頻度は減少し、「同級生」「先輩」「アルバイトやボランティア先の年上の人」との頻度は増加していた。

これらより大学に入学し行動の自由度が増す中で、高校生とはコミュニケーションの対象が異なってくるのが分かる。「家族」や「先生」といったいわば「保護してくれる大人」ではなく「先輩」や「年上」の「少しだけ人生の先を歩いている人」との交流が増すことで様々なことを見聞きし、体験することができる。その体験は大学生に大人になった実感をもたせ、多少なりとも世の中や人生について学んだような感覚を持たせるかもしれない。特に男子について「家族」や「先生」とのコミュニケーションの減少と仮想的有能感の増加がみられ、自分を子ども扱いし、保護してくれる存在からの脱却と仮想的有能感の増加との関連が示唆される結果となっている。

しかし自己肯定感はやや低下する傾向が示された。これに関しても行動範囲の広がりやさまざまな新しい体験との出会い、それに伴う人間関係の新たな構築などとの関連から考察することができる。これらは上述のように仮想的有能感を上昇させる刺激要因となりうるが、同時に体験の乏しい大学新入生にとっては自己の幼さを痛感させられるストレスフルな要因でもある。ただ、今回得られた結果は傾向差であり、大学に入って初めての定期試験直前という時期的な要因などを勘案すると断言はできない。今後の時系列的なデータとコミュニケーションの質からの視点による更なる分析が必要とされる。

表5 各調査時期におけるコミュニケーション頻度得点 (SD)

	4月	7月	有意性
家族	4.54 (0.78)	4.40 (0.91)	4月 > 7月 **
先生	2.75 (1.16)	2.50 (1.18)	4月 > 7月 **
同級生	4.67 (0.69)	4.76 (0.60)	4月 < 7月 *
友人	4.77 (0.51)	4.74 (0.55)	n.s.
先輩	3.24 (1.27)	3.43 (1.27)	4月 < 7月 *
地域	2.69 (1.22)	2.42 (1.27)	4月 > 7月 **
年上	2.28 (1.46)	2.81 (1.55)	4月 < 7月 **
年上・ 非体験者 (人)	109	64	4月 > 7月 **
全7対象合計	24.93 (4.30)	25.05 (4.43)	n.s.
年上4対象合計	10.96 (3.61)	11.16 (3.68)	n.s.

** $p < 0.01$, * $p < 0.05$

表6 男女ごとの各時期における仮想的有能感・自己肯定感の得点 (SD)

	4月	7月	有意性
仮想的有能感			
男子	28.27 (7.01)	29.79 (7.49)	性) 男子 < 女子 **
女子	25.43 (6.12)	27.44 (7.32)	時期) 4月 > 7月 **
自己肯定感			
男子	22.25 (4.29)	22.12 (4.48)	性) n.s.
女子	21.76 (3.75)	21.37 (3.95)	時期) 4月 > 7月 †

** $p < 0.01$, † $p < 0.10$

表7 男女ごとの各調査時期におけるコミュニケーション頻度得点 (SD)

		4月	7月	有意性
家族	男子	4.370 (0.88)	4.19 (1.01)	性) 男子 < 女子 **
	女子	4.71 (0.62)	4.60 (0.74)	時期) 4月 > 7月 **
先生	男子	2.80 (1.22)	2.39 (1.16)	男: 4月 < 7月 **
	女子	2.70 (1.09)	2.61 (1.18)	
同級生	男子	4.68 (0.62)	4.79 (0.50)	時期) 4月 < 7月 *
	女子	4.66 (0.75)	4.72 (0.69)	
友人	男子	4.79 (0.43)	4.74 (0.54)	n.s.
	女子	4.74 (0.58)	4.74 (0.55)	
先輩	男子	3.23 (1.28)	3.46 (1.30)	時期) 4月 < 7月 *
	女子	3.24 (1.26)	3.41 (1.25)	
地域	男子	2.69 (1.22)	2.43 (1.26)	時期) 4月 > 7月 **
	女子	2.69 (1.22)	2.41 (1.28)	
年上	男子	2.32 (1.46)	2.83 (1.59)	時期) 4月 < 7月 **
	女子	2.24 (1.47)	2.79 (1.51)	
コミュニケーション 非体験者 (人)	男子	54	33	n.s.
	女子	55	31	
全7対象 合計	男子	24.88 (4.31)	24.83 (4.50)	n.s.
	女子	24.98 (4.29)	25.28 (4.34)	
年上4対象 合計	男子	11.04 (3.60)	11.10 (3.72)	n.s.
	女子	10.88 (3.62)	11.21 (3.63)	

** $p < 0.01$, * $p < 0.05$

表 8 学科ごとの各時期における仮想的有能感・自己肯定感の得点 (SD)

		4月	7月	有意性
仮想的有能感				
初等		26.64 (6.24)	28.03 (7.09)	学科) 生 > 初 > 心 ** 時期) 4月 < 7月
生涯		28.64 (7.04)	35.50 (7.50)	
心理		24.87 (6.70)	27.33 (7.85)	
自己肯定感				
初等		22.41 (3.80)	22.10 (4.01)	学科) 初 = 生 > 心 *
生涯		22.21 (3.68)	22.00 (3.98)	
心理		20.87 (4.68)	20.64 (4.80)	

** $p < 0.01$, * $p < 0.05$

表 9 学科ごとの各調査時期におけるコミュニケーション頻度得点 (SD)

		4月	7月	有意性
家族	初等	4.53 (0.79)	4.46 (0.89)	4月 : 心 > 初 = 生 * 心 : 4月 > 7月
	生涯	4.38 (0.84)	4.32 (0.91)	
	心理	4.76 (0.57)	4.38 (0.92)	
先生	初等	2.91 (1.21)	2.62 (1.17)	時期) 4月 > 7月 **
	生涯	2.54 (1.10)	2.38 (1.20)	
	心理	2.67 (1.05)	2.42 (1.14)	
同級生	初等	4.69 (0.59)	4.85 (0.40)	n.s.
	生涯	4.69 (0.66)	4.69 (0.70)	
	心理	4.58 (0.89)	4.64 (0.77)	
友人	初等	4.77 (0.42)	4.78 (0.42)	n.s.
	生涯	4.79 (0.53)	4.76 (0.51)	
	心理	4.73 (0.65)	4.64 (0.77)	
先輩	初等	3.32 (1.13)	3.50 (1.15)	学科) 生 = 初 > 心 ** 時期) 4月 < 7月 *
	生涯	3.39 (1.34)	3.64 (1.33)	
	心理	2.87 (1.39)	3.02 (1.36)	
地域	初等	2.68 (1.19)	2.46 (1.28)	時期) 4月 > 7月 **
	生涯	2.79 (1.26)	2.47 (1.39)	
	心理	2.58 (1.23)	2.25 (1.05)	
年上	初等	2.19 (1.40)	2.89 (1.54)	時期) 4月 < 7月 **
	生涯	2.38 (1.49)	2.75 (1.55)	
	心理	2.35 (1.56)	2.71 (1.56)	
コミュニケーション 非体験者 (人)	初等	54	27	n.s.
	生涯	28	22	
	心理	27	15	
全 7 対象 合計	初等	25.10 (4.01)	25.55 (4.01)	n.s.
	生涯	24.96 (4.68)	25.01 (5.00)	
	心理	24.55 (4.34)	24.05 (4.27)	
年上 4 対象 合計	初等	11.10 (3.40)	11.47 (3.43)	n.s.
	生涯	11.10 (3.90)	11.24 (4.20)	
	心理	10.47 (3.60)	10.40 (3.33)	

** $p < 0.01$, * $p < 0.05$

3. 課外活動と自己意識との関係の検討

3-1. 4月時点におけるサークル活動意思との関係

第1回調査時点において、サークルに入部もしくは活動意思を示していたか否かと仮想的有能感および自己肯定感の第1回・第2回調査における尺度得点の平均値を比較した。まず仮想的有能感について、活動意思（あり・なし）×調査時期（第1回・第2回）の2要因混合分散分析を行ったところ、調査時期の主効果が有意だった ($F_{[1,241]}=22.08, p<0.01$)。活動意思の主効果および交互作用は有意ではなかった。次に自己肯定感について分散分析を行ったところ、活動意思の主効果が有意だった ($F_{[1,241]}=7.52, p<0.01$)。調査時期の主効果および交互作用は有意ではなかった。

3-2. 4月時点におけるアルバイト活動意思との関係

3-1.と同様に、アルバイト活動意思との関係を検討した。まず仮想的有能感について分散分析を行ったところ、調査時期の主効果が有意だった ($F_{[1,241]}=18.78, p<0.01$)。活動意思の主効果および交互作用は有意ではなかった。次に自己肯定感について分散分析を行ったところ、交互作用が10%水準で有意傾向だった ($F_{[1,241]}=3.48, p<0.10$)。アルバイト意思の主効果および調査時期の主効果は有意ではなかった。交互作用が有意傾向だったため、試みに単純主効果の検定を行ったところ、就労済みまたはアルバイト意思ありグループにおける調査時期の平均値の差が有意だった ($F_{[1,182]}=5.77, p<0.05$)。

3-3. 4月時点におけるボランティア活動意思との関係

3-1.、3-2.と同様に、ボランティア活動意思との関係を検討した。まず仮想的有能感について分散分析を行ったところ、調査時期の主効果が有意だった ($F_{[1,241]}=25.34, p<0.01$)。活動意思の主効果および交互作用は有意ではなかった。次に自己肯定感について分散分析を行ったところ、調査時期の主効果が10%水準で有意傾向だった ($F_{[1,241]}=2.77, p<0.10$)。活動意思の主効果および交互作用は有意ではなかった。以上の結果を表10に示す。

3-4. 7月時点におけるサークル活動状況との関係

第1回調査時点における参加意思の有無と第2回調査時点における参加状況の組み合わせで、以下の4群を設定した。

- ・参加なし群：第1回調査時点で参加意思がなく、第2回調査でも参加していない若しくは参加していると回答しているが活動時間が0時間である対象者から構成した群
- ・意思のみ群：第1回調査時点で参加意思があったが、第2回調査時点で参加していないもしくは参加していると回答しているが活動時間が0時間である対象者から構成した群

- ・参加群 1：第 1 回調査時点で参加意思がなかったが、第 2 回調査で参加していると回答し、かつ活動時間が 0.1 時間以上の対象者から構成した群
 - ・参加群 2：第 1 回調査時点で参加済みあるいは参加意思がなく、第 2 回調査で参加していると回答し、かつ活動時間が 0.1 時間以上の対象者から構成した群
- この 4 群間で、仮想的有能感および自己肯定感の第 1 回・第 2 回調査における尺度得点の平均値を比較した。

まず、サークル活動状況の違いで上記 4 群を設定し、仮想的有能感を従属変数として、サークル活動状況(4)×調査実施時期(2)の分散分析を行ったところ、調査時期の主効果 ($F_{[1,239]}=16.23, p<0.01$) が有意だった。サークル活動状況の主効果および交互作用は有意ではなかった。

次に自己肯定感を従属変数として同様の分析を行ったところ、サークル活動状況の主効果 ($F_{[3,239]}=2.50, p<0.10$) および調査時期の主効果 ($F_{[1,239]}=3.05, p<0.10$) がそれぞれ 10% 水準で有意傾向だった。交互作用は有意ではなかった。サークル活動状況の主効果が有意傾向だったため、試みに Shaffer の法による多重比較を行ったが、いずれの水準間も有意ではなかった。

3-5. 7 月時点におけるアルバイト活動状況との関係

第 1 回調査時点での参加意思の有無と第 2 回調査時点での参加状況の組み合わせを、3-4. と同様に設定し、同様の分析を行った。まず仮想的有能感について分散分析を行ったところ、調査時期の主効果が有意だった ($F_{[1,239]}=13.65, p<0.01$)。また、アルバイト活動状況の主効果が 10% 水準で有意傾向だった ($F_{[3,239]}=2.49, p<0.10$)。交互作用は有意ではなかった。アルバイト活動状況の主効果が有意傾向だったため、試みに Shaffer の法による多重比較を行ったが、いずれの水準間も有意ではなかった。

次に、自己肯定感について同様の分析を行ったところ、アルバイト活動状況の主効果が有意だった ($F_{[3,239]}=2.77, p<0.05$)。調査実施時期の主効果および交互作用は有意ではなかった。アルバイト活動状況の主効果が有意だったため、Shaffer の法による多重比較を行ったところ、参加群 1 の方が参加なし群より自己肯定感得点が大きかった。他の水準間の差は有意ではなかった。

3-6. 7 月時点におけるボランティア活動状況との関係

ボランティア活動状況によって 3-4.、3-5. と同様の群を設定し、同様の分析を行った。まず仮想的有能感について分析を行ったところ、調査実施時期の主効果が有意だった ($F_{[1,239]}=19.27, p<0.01$)。ボランティア活動状況の主効果および交互作用は有意ではなかった。次に自己肯定感について分析を行ったところ、ボランティア活動状況の主効果 ($F_{[3,239]}=1.61$)、調査実施時期の主効果および交互作用のいずれも有意ではなかった。以上の結果を表 11 に示す。

3-7. 考察

仮想的有能感については課外活動の種類や状況によらず、第2回調査時点の方が第1回調査時点より相対的に高くなったことが示唆された。前述したように、仮想的有能感は友人等親しい他者に対して感じる可能性がある。7月時点では4月時点と比べて、同級生に対する親和性が高まったことが予想されるが、そのことによって仮想的有能感を高めることにつながったのかもしれない。ただし、親しい他者以外の（親和性の低い）他者との比較によって生じた可能性も否定できない。

一方、自己肯定感については、第1回調査・第2回調査の間で基本的に大きな変化は見られなかった。このことは、自己肯定感を変容させる働きかけや出来事を経験しなければ、自己肯定感は一定であることを示唆しているのかもしれない。一方で、課外活動を行う意思や、第2回調査時点の実際の参加状況が自己肯定感に影響を与える可能性が示唆され、課外活動を通じた他者とのかかわりが自身の自己肯定感（自己肯定意識）に影響を与える可能性が考えられる。ただ、今回の調査ではその違いはわずかなものであり、課外活動への参加がどの程度自己肯定感に影響を与えるのかは今後継続的な検討が必要であるだろう。

表10 第1回調査時点の課外活動意思別の仮想的有能感・自己肯定感の平均(SD)

課外活動意思	n	仮想的有能感得点		自己肯定感得点	
		第1回調査	第2回調査	第1回調査	第2回調査
サークル活動					
入部済みまたは意思あり	162	26.82 (6.60)	28.59 (7.27)	22.54 (3.83)	22.18 (4.00)
意思なし	81	26.86 (7.06)	28.62 (8.02)	20.93 (4.26)	20.86 (4.61)
アルバイト					
就労済みまたは意思あり	183	26.94 (6.72)	28.70 (7.41)	22.21 (3.88)	21.79 (4.11)
意思なし	60	26.50 (6.86)	28.30 (7.87)	21.37 (4.46)	21.60 (4.69)
ボランティア					
活動ありまたは意思あり	134	27.52 (7.01)	29.11 (7.64)	21.69 (4.35)	21.39 (4.51)
意思なし	109	25.98 (6.33)	27.98 (7.34)	22.39 (3.61)	22.17 (3.87)

表 11 課外活動参加状況・調査実施時期別の仮想的有能感・自己肯定感の平均 (SD)

課外活動種別	調査実施時期	課外活動参加状況				
		参加なし	参加意思のみ	参加群 1	参加群 2	
仮想的有能感	サークル	<i>n</i>	47	27	34	135
	第 1 回		27.26 (6.38)	26.78 (7.30)	26.32 (7.97)	26.82 (6.48)
	第 2 回		28.70 (7.27)	28.19 (8.44)	28.50 (9.07)	28.67 (7.05)
	アルバイト	<i>n</i>	42	54	18	129
	第 1 回		27.74 (6.92)	26.22 (5.71)	23.61 (5.92)	27.24 (7.10)
	第 2 回		29.64 (8.30)	27.41 (6.84)	25.17 (5.81)	29.24 (7.60)
自己肯定感	ボランティア	<i>n</i>	100	61	34	48
	第 1 回		27.79 (7.55)	26.03 (6.03)	26.74 (5.12)	25.92 (6.76)
	第 2 回		29.67 (8.16)	27.59 (7.03)	27.44 (5.64)	28.48 (7.76)
	サークル	<i>n</i>	47	27	34	135
	第 1 回		21.00 (4.72)	22.89 (3.62)	20.82 (3.59)	22.47 (3.88)
	第 2 回		20.89 (5.07)	21.96 (3.97)	20.82 (3.95)	22.22 (4.02)
自己肯定感	アルバイト	<i>n</i>	42	54	18	129
	第 1 回		20.43 (4.12)	22.13 (4.11)	23.56 (4.55)	22.24 (3.80)
	第 2 回		20.74 (4.33)	21.46 (4.50)	23.61 (5.00)	21.92 (3.94)
	ボランティア	<i>n</i>	100	61	34	48
	第 1 回		21.59 (4.67)	22.89 (3.34)	21.97 (3.27)	21.75 (3.86)
	第 2 回		21.10 (4.77)	22.57 (3.85)	22.24 (3.59)	21.67 (3.88)

4. 入学意思と自己意識との関係の検討

4-1. 入学意思と自己意識の相関

入学意思の強さと、仮想的有能感 (第 1 回・第 2 回)・自己肯定感 (第 1 回・第 2 回) の相関を求めた結果を表 12 に示す。分析の結果、入学意思と第 1 回調査時点の仮想的有能感の間 ($r=-0.25$, $t_{[241]}=4.05$, $p<0.01$: 両側検定)、および入学意思と第 2 回調査時点の仮想的有能感の間 ($r=-0.18$, $t_{[241]}=2.79$, $p<0.01$: 両側検定) に弱い負の相関が得られた。

4-2. 入学意思および課外活動参加状況と自己意識との関係

試みに入学意思の強さと第 2 回調査段階での課外活動の参加状況との組み合わせで以下の 4 群を設定し、第 1 回および第 2 回調査時点における、仮想的有能感・自己肯定感の得点を比較した (表 13 参照)。

- ・第 1 群：入学意思が相対的に低く (入学意思尺度 1～5)、第 2 回調査段階で実質的に活動を行っていない (活動していない、あるいは活動団体数の記載があっても活動時間が 0.1 時間以下)
- ・第 2 群：入学意思が相対的に高く (入学意思尺度 6～10)、第 2 回調査段階で活動を行っていない
- ・第 3 群：入学意思が相対的に低く、第 2 回調査段階で活動している
- ・第 4 群：入学意思が相対的に高く、第 2 回調査段階で活動している

(1)サークル活動状況との関係

仮想的有能感を従属変数として分散分析を行った結果、4 群の主効果 ($F_{[3,239]}=2.95$, $p<0.05$)、調査時期の主効果 ($F_{[1,239]}=9.92$, $p<0.01$) が有意だったが、

4 群間の多重比較の結果はいずれの群間も有意ではなかった。自己肯定感については、調査時期の主効果のみ有意だった ($F_{[1,239]}=3.98, p<0.05$)。

(2) アルバイト活動状況との関係

仮想的有能感を従属変数として分析した結果、4 群の主効果 ($F_{[3,239]}=2.98, p<0.05$) および調査時期の主効果 ($F_{[1,239]}=15.21, p<0.01$) が有意だったが、4 群間の多重比較の結果はいずれの群間も有意ではなかった。自己肯定感については、いずれの効果も有意ではなかった。

(3) ボランティア活動状況との関係

仮想的有能感を従属変数として分析した結果、交互作用が有意だった ($F_{[3,239]}=4.99, p<0.01$)。そこで単純主効果の検定を行ったところ、第 1 回調査時における 4 群間の差が有意だった ($F_{[3,239]}=4.45, p<0.01$)。Shaffer の法による多重比較の結果、第 2 回調査時におけるボランティア活動の有無によらず、入学意思の高い群より低い群の方が仮想的有能感は高かった。第 2 回調査時における 4 群間の差も有意だったが ($F_{[3,239]}=2.68, p<0.05$)、多重比較の結果はいずれの群間も有意ではなかった。また、第 1 群を除く 3 つの群において、調査実施時期の違いによる仮想的有能感得点の差が有意または 10% 水準で有意傾向だった (第 1 群: $F_{[1,51]}=0.04$; 第 2 群: $F_{[1,108]}=24.39, p<0.01$; 第 3 群: $F_{[1,29]}=9.46, p<0.01$; 第 4 群: $F_{[1,59]}=3.02, p<0.10$)。自己肯定感を従属変数として分析した結果、いずれの効果も有意ではなかった。

4-3. 考察

以上の結果から、入学当初の入学意思の強さと仮想的有能感の強さにわずかに関係がみられることが示唆された。教育学部に入学してくる学生の中には、教員養成系の国公立大を第一志望としていたものの、最終的に本学に入学してきた学生もいると思われる。そのような学生にとって、同級生の存在は自分自身の仮想的な有能感を高める存在である可能性はある。ただその違いはわずかなレベルであり、本人の大学生活の適応状況とどの程度関連してくるのかは、今回の調査からは読み取れない。いわゆる不本意入学による不適応の問題については、今後の検討が必要だろう。一方、このような入学意思と課外活動への参加状況との関係はあまり見られなかった。入学の際の入学意思の強さがどうであれ、課外活動への参加意欲・参加状況にはあまり影響を与えない可能性が考えられる。

表 12 入学意思と仮想的有能感・自己肯定感各得点との間の相関係数

仮想的有能感 (第 1 回調査)	仮想的有能感 (第 2 回調査)	自己肯定感 (第 1 回調査)	自己肯定感 (第 2 回調査)
-0.25**	-0.18**	0.08	0.02

** ; $p<0.01$

表 13 入学意思×課外活動参加状況による 4 群における自己意識 2 得点の平均 (SD)

課外活動種別	調査実施時期	入学意思×課外活動参加状況				
		第 1 群	第 2 群	第 3 群	第 4 群	
仮想的有能感	サークル	<i>n</i>	20	54	54	115
	第 1 回		30.35 (7.61)	25.87 (5.94)	28.54 (8.42)	25.87 (5.71)
	第 2 回		29.85 (8.39)	28.02 (7.40)	30.22 (8.39)	27.90 (6.90)
		<i>n</i>	31	65	43	104
自己肯定感	アルバイト	第 1 回	28.97 (7.31)	25.89 (5.51)	29.07 (8.87)	25.86 (5.95)
	第 2 回		29.29 (8.26)	27.95 (7.22)	30.72 (8.44)	27.92 (6.97)
		<i>n</i>	52	109	22	60
	ボランティア	第 1 回	29.65 (8.56)	25.92 (5.86)	27.55 (7.24)	25.78 (5.64)
	第 2 回		29.50 (8.44)	28.59 (7.49)	31.59 (8.09)	26.75 (6.04)
仮想的有能感	サークル	<i>n</i>	20	54	54	115
	第 1 回		21.60 (4.59)	21.72 (4.40)	21.78 (4.50)	22.30 (3.54)
	第 2 回		20.60 (5.02)	21.54 (4.60)	21.80 (4.58)	22.01 (3.77)
		<i>n</i>	31	65	43	104
自己肯定感	アルバイト	第 1 回	21.23 (4.38)	21.46 (4.12)	22.09 (4.59)	22.53 (3.60)
	第 2 回		21.39 (4.86)	21.03 (4.22)	21.53 (4.64)	22.38 (3.86)
		<i>n</i>	52	109	22	60
	ボランティア	第 1 回	22.12 (4.63)	22.06 (4.08)	20.82 (4.11)	22.22 (3.36)
	第 2 回		21.42 (4.92)	21.77 (4.29)	21.59 (4.24)	22.02 (3.59)

5. コミュニケーション頻度の違いによる 4 群における自己意識の比較

4 月と 7 月の両調査時期のコミュニケーション頻度をもとに調査協力者を以下の 4 群に分類し、仮想的有能感と自己肯定感の 2 尺度の得点を比較した。

- ・ 高高群：両時期でいずれも当該対象とのコミュニケーション頻度が高かった群
- ・ 高低群：4 月では当該対象との高いコミュニケーションを示したが、7 月にはその頻度が低くなっていた群
- ・ 低高群：4 月には当該対象とのコミュニケーション頻度は低かったものの、7 月に高い頻度となっていた群
- ・ 低低群：両時期でいずれも当該対象とのコミュニケーション頻度が低かった群
 なお「年上」に関しては、両時期を通じてコミュニケーションをおこなっていない者を「未体験群」として抽出し、比較に加えることとした。

5-1. 家族

群と時期（4 月、7 月）を要因とした 2 要因の分散分析をおこなった結果、仮想的有能感については交互作用に有意な傾向がみられた ($F_{[3,239]}=2.15, p<0.10$)。そこで単純主効果の検定をおこなった結果、時期における群間差については 7 月に有意な傾向がみられたが ($p<0.10$)、Holm 法による多重比較をおこなった結果、明確な差は示されなかった。各群における時期での違いについては、高高群 ($p<0.10$)、高低群 ($p<0.05$)、低高群 ($p<0.01$) において有意であり、いずれも 7 月にかけて増加していた。低低群については有意な差はみられなかった。自己肯定感についても同様の分散分析をおこなったが、有意な差はみられなかった(表 14 参照)。

5-2. 先生

群と時期を要因とした2要因の分散分析をおこなった結果、仮想的有能感については時期の主効果が有意であり ($F_{[1,239]}=26.02, p<0.01$)、7月にかけて増加していた。自己肯定感についても同様の分散分析をおこなったが、有意な差はみられなかった(表15参照)。

5-3. 同級生

群と時期を要因とした2要因の分散分析をおこなった結果、仮想的有能感については群の主効果 ($F_{[3,239]}=3.03, p<0.01$) と時期の主効果 ($F_{[1,239]}=8.95, p<0.01$) がそれぞれ有意だった。群間差について Holm 法による多重比較をおこなった結果、高低群の得点が他の3群よりも高かった ($MSe=85.09, p<0.05$)。時期に関しては7月にかけて増加していることが示された。自己肯定感についても同様の分散分析をおこなったが、有意な差はみられなかった(表16参照)。

5-4. 友人

群と時期を要因とした2要因の分散分析をおこなった結果、仮想的有能感に有意な交互作用がみられた ($F_{[3,239]}=3.32, p<0.05$)。そこで単純主効果の検定をおこなった結果、各群における時期での違いについては高低群にのみ有意な差がみられ ($p<0.01$)、7月にかけて上昇していた。各時期における群間差についてはいずれも有意な差はみられなかった。自己肯定感については時期の主効果 ($F_{[1,239]}=3.13, p<0.10$) が有意傾向であり、7月にかけて減少していた(表17参照)。

5-5. 先輩

群と時期を要因とした2要因の分散分析をおこなった結果、仮想的有能感については時期の主効果が有意であり ($F_{[1,239]}=26.63, p<0.01$)、7月にかけて上昇していた。自己肯定感についても同様の分散分析をおこなったが、有意な差はみられなかった(表18参照)。

5-6. 地域

群と時期を要因とした2要因の分散分析をおこなった結果、仮想的有能感については時期の主効果が有意であり ($F_{[1,239]}=24.26, p<0.01$)、7月にかけて上昇していた。自己肯定感についても同様の分散分析をおこなったが、有意な差はみられなかった(表19参照)。

5-7. 年上

群と時期を要因とした2要因の分散分析をおこなった結果、仮想的有能感については時期の主効果が有意であり ($F_{[1,238]}=15.72, p<0.01$)、7月にかけて上昇していた。自己肯定感についても同様の分散分析をおこなったが、有意な差はみられなかった(表20参照)。

5-8. コミュニケーション7対象の合計

全7対象とのコミュニケーション頻度の合計をもとに、4群に分類した。群と時期を要因とした2要因の分散分析をおこなった結果、仮想的有能感については時期の主効果が有意であり ($F_{[1,239]}=22.72, p<0.01$)、7月にかけて増加していた。自己肯定感についても同様の分散分析をおこなったが、有意な差はみられなかった(表21参照)。

5-9. 年上4対象の合計

全7対象のうち「年上の4対象(先生、先輩、地域、年上)」とのコミュニケーションの合計をもとに、4群に分類した(表22参照)。

群と時期を要因とした2要因の分散分析をおこなった結果、仮想的有能感については時期の主効果が有意であり ($F_{[1,239]}=25.28, p<0.01$)、7月にかけて増加していた。

自己肯定感についても同様の分散分析をおこなったところ、群の主効果に有意な傾向がみられた ($F_{[3,239]}=2.24, p<0.10$)。そこでHolm法による多重比較をおこなった結果、高高群が他の3群よりも高い得点を示し、また低低群は低高群よりも低い得点であることが示された ($MSe=30.71, p<0.05$)。

5-10. 考察

以上の結果より、「同級生」「友人」において、入学後3か月でコミュニケーション頻度が低下した群の仮想的有能感が上昇したことが示された。大学生にとって「同級生」や「友人」は対等の存在であり、そのコミュニケーションは自己と他者とを客観的に認識するための指針となる。交流の低下によって客観的な評価をする機会が失われ、それが仮想的有能感の上昇に結び付くと考えられるが、明確な根拠とは言い難い。同様に自己肯定感についても、年上の対象との高いレベルでのコミュニケーションを維持することとの関連が示唆される結果となったが、引き続き継続的な測定をし、長期的なスパンでの変化の検討が必要とされる。

表 14 「家族」とのコミュニケーションの頻度別 4 群における
仮想的有能感・自己肯定感の得点 (SD)

	4 月	7 月	有意性
仮想的有能感			7 月における群間差 † 多重比較の結果 <i>n.s.</i>
高高 (<i>n</i> = 124)	25.82 (6.22)	27.33 (7.21)	
高低 (<i>n</i> = 38)	26.63 (6.62)	28.66 (7.15)	高高群: 4 月 < 7 月 †
低高 (<i>n</i> = 22)	27.18 (6.38)	30.25 (7.83)	高低群: 4 月 < 7 月 *
低低 (<i>n</i> = 59)	28.95 (7.41)	30.25 (7.83)	低高群: 4 月 < 7 月 **
自己肯定感			
高高 (<i>n</i> = 124)	22.50 (4.10)	22.10 (4.35)	
高低 (<i>n</i> = 38)	21.63 (4.30)	21.39 (4.94)	<i>n.s.</i>
低高 (<i>n</i> = 22)	21.45 (2.98)	21.77 (2.94)	
低低 (<i>n</i> = 59)	21.39 (3.90)	21.19 (3.81)	

***p*<0.01, **p*<0.05, † *p*<0.10

表 15 「先生」とのコミュニケーションの頻度別 4 群における
仮想的有能感・自己肯定感の得点 (SD)

	4 月	7 月	有意性
仮想的有能感			
高高 (<i>n</i> = 61)	25.95 (5.55)	28.05 (6.32)	
高低 (<i>n</i> = 61)	27.10 (7.49)	29.15 (8.89)	
低高 (<i>n</i> = 36)	26.50 (5.82)	28.81 (7.44)	時期) 4 月 < 7 月 **
低低 (<i>n</i> = 85)	27.45 (7.18)	28.52 (7.17)	
自己肯定感			
高高 (<i>n</i> = 61)	22.77 (4.50)	22.43 (4.48)	
高低 (<i>n</i> = 61)	22.07 (3.72)	21.85 (3.76)	<i>n.s.</i>
低高 (<i>n</i> = 36)	22.28 (3.62)	22.00 (3.67)	
低低 (<i>n</i> = 85)	21.28 (3.93)	21.06 (4.50)	

***p*<0.01

表 16 「同級生」とのコミュニケーションの頻度別 4 群における
仮想的有能感・自己肯定感の得点 (SD)

	4 月	7 月	有意性
仮想的有能感			
高高 (<i>n</i> = 162)	22.30 (6.53)	28.55 (7.80)	群間差)
高低 (<i>n</i> = 24)	29.88 (7.25)	32.04 (6.71)	高低 > 低低 = 高高 = 低高
低高 (<i>n</i> = 37)	25.38 (5.97)	27.38 (6.28)	時期) 4 月 < 7 月 **
低低 (<i>n</i> = 20)	27.40 (7.74)	27.15 (6.58)	
自己肯定感			
高高 (<i>n</i> = 162)	22.30 (3.92)	21.94 (4.17)	
高低 (<i>n</i> = 24)	21.67 (4.59)	21.46 (4.01)	<i>n.s.</i>
低高 (<i>n</i> = 37)	21.57 (3.87)	21.70 (4.03)	
低低 (<i>n</i> = 20)	20.80 (4.13)	20.55 (5.12)	

***p*<0.01

表 17 「友人」とのコミュニケーションの頻度別 4 群における
仮想的有能感・自己肯定感の得点 (SD)

	4 月	7 月	有意性
仮想的有能感			
高高 ($n = 163$)	27.09 (6.86)	28.57 (7.60)	高低群：4 月 < 7 月 **
高低 ($n = 31$)	25.97 (6.59)	30.52 (7.59)	
低高 ($n = 26$)	26.08 (5.80)	26.92 (7.05)	
低低 ($n = 23$)	27.00 (6.81)	28.13 (6.46)	
自己肯定感			
高高 ($n = 163$)	22.40 (4.06)	22.20 (4.15)	n.s.
高低 ($n = 31$)	21.26 (4.31)	21.03 (4.63)	
低高 ($n = 26$)	21.54 (3.59)	21.69 (3.81)	
低低 ($n = 23$)	20.70 (3.41)	19.52 (3.95)	

** $p < 0.01$, † $p < 0.10$

表 18 「先輩」とのコミュニケーションの頻度別 4 群における
仮想的有能感・自己肯定感の得点 (SD)

	4 月	7 月	有意性
仮想的有能感			
高高 ($n = 101$)	27.35 (6.71)	29.12 (7.72)	時期) 4 月 < 7 月 **
高低 ($n = 27$)	26.59 (6.54)	29.56 (7.44)	
低高 ($n = 42$)	27.00 (5.45)	29.71 (6.30)	
低低 ($n = 73$)	26.11 (7.39)	26.89 (7.55)	
自己肯定感			
高高 ($n = 101$)	22.37 (3.64)	21.96 (3.73)	n.s.
高低 ($n = 27$)	21.89 (4.07)	21.63 (4.25)	
低高 ($n = 42$)	22.71 (3.89)	22.81 (3.97)	
低低 ($n = 73$)	21.12 (4.44)	20.86 (4.83)	

** $p < 0.01$

表 19 「地域」とのコミュニケーションの頻度別 4 群における
仮想的有能感・自己肯定感の得点 (SD)

	4 月	7 月	有意性
仮想的有能感			
高高 ($n = 71$)	25.73 (6.37)	27.77 (7.67)	時期) 4 月 < 7 月 **
高低 ($n = 48$)	26.23 (7.10)	28.50 (7.35)	
低高 ($n = 26$)	27.92 (6.91)	30.31 (7.65)	
低低 ($n = 98$)	27.63 (6.60)	28.80 (7.32)	
自己肯定感			
高高 ($n = 71$)	22.38 (3.49)	22.01 (3.76)	n.s.
高低 ($n = 48$)	22.85 (4.43)	22.19 (4.26)	
低高 ($n = 26$)	21.46 (4.21)	21.65 (4.62)	
低低 ($n = 98$)	21.45 (4.09)	21.35 (4.41)	

** $p < 0.01$

表 20 「年上」とのコミュニケーションの頻度別 5 群における
仮想的有能感・自己肯定感の得点 (SD)

	4 月	7 月	有意性
仮想的有能感			
高高 ($n = 47$)	26.36 (6.38)	28.00 (6.73)	時期) 4 月 < 7 月 **
高低 ($n = 16$)	28.19 (5.35)	28.81 (6.34)	
低高 ($n = 63$)	25.10 (6.51)	28.49 (7.65)	
低低 ($n = 73$)	28.34 (7.00)	29.26 (8.17)	
未体験 ($n = 44$)	26.82 (6.71)	28.23 (7.19)	
自己肯定感			
高高 ($n = 47$)	23.28 (4.05)	23.38 (4.09)	n.s.
高低 ($n = 16$)	21.69 (3.96)	21.63 (4.43)	
低高 ($n = 63$)	22.19 (3.69)	21.83 (3.78)	
低低 ($n = 73$)	21.67 (4.09)	21.05 (4.39)	
未体験 ($n = 44$)	21.02 (4.03)	21.05 (4.19)	

** $p < 0.01$

表 21 コミュニケーション (全 7 対象) の合計得点別の 4 群における
仮想的有能感・自己肯定感の得点 (SD)

	4 月	7 月	有意性
仮想的有能感			
高高 ($n = 86$)	25.88 (6.49)	28.17 (7.74)	時期) 4 月 < 7 月 **
高低 ($n = 45$)	28.56 (6.25)	30.27 (6.84)	
低高 ($n = 29$)	26.79 (5.81)	29.21 (6.59)	
低低 ($n = 83$)	26.89 (7.31)	27.93 (7.72)	
自己肯定感			
高高 ($n = 86$)	23.01 (3.84)	22.67 (3.82)	n.s.
高低 ($n = 45$)	21.69 (4.45)	21.31 (4.57)	
低高 ($n = 29$)	22.00 (3.23)	22.24 (3.49)	
低低 ($n = 83$)	21.12 (4.00)	20.83 (4.47)	

** $p < 0.01$

表 22 コミュニケーション (年上 4 対象) の合計得点別の 4 群における
仮想的有能感・自己肯定感の得点 (SD)

	4 月	7 月	有意性
仮想的有能感			
高高 ($n = 78$)	26.00 (6.63)	28.26 (7.62)	時期) 4 月 < 7 月 **
高低 ($n = 49$)	27.98 (6.24)	29.39 (7.14)	
低高 ($n = 34$)	26.62 (6.20)	29.44 (7.87)	
低低 ($n = 82$)	27.02 (7.19)	28.11 (7.37)	
自己肯定感			群)
高高 ($n = 78$)	23.12 (3.84)	22.82 (3.88)	高高 > 高低、低高、低低 低高 > 低低 †
高低 ($n = 49$)	21.63 (3.85)	21.37 (4.17)	
低高 ($n = 34$)	21.47 (3.70)	21.97 (3.98)	
低低 ($n = 82$)	21.38 (4.22)	20.84 (4.47)	

** $p < 0.01$, † $p < 0.10$

6. 入学意思・課外活動の活動量・コミュニケーション頻度の変化と、第2回調査時の仮想的有能感・自己肯定感との関係

4月当初の入学意思や課外活動の活動量、対人コミュニケーションの頻度における第1回調査時と第2回調査時の変化が、第2回調査時における仮想的有能感や自己肯定感の程度と関係しているのか探索的に検討すべく、入学意思・課外活動の活動量・対人コミュニケーション頻度の変化量を説明変数、第2回調査時における仮想的有能感・自己肯定感を目的変数として重回帰分析を行った。分析にあたり、以下のような変数操作を行った。

- ・課外活動の活動量：第1回調査時において、課外活動に意欲を見せていなかった学生が第2回調査時で課外活動を行っている場合、何らかの変化を示したと考えた。そこで、第2回調査時におけるサークル活動時間、アルバイト活動時間、ボランティア活動時間を、第1回調査時において各々の活動をする予定がないと回答した調査協力者にのみ1.5を係数としてかけ、各々の課外活動量とした。
- ・対人コミュニケーション頻度の変化量：コミュニケーション7対象それぞれについて、第2回調査時の回答から第1回調査時の回答を引いた値を変化量とした。各変化量の平均とSDを表23に示す。

なお、コミュニケーション頻度の変化量の関係から、アルバイトやボランティア活動を第2回調査時に行っていない調査協力者を分析から除外した。結果、男性87名、女性92名に対し、上記の分析を行った。

6-1. 仮想的有能感について

強制投入法により分析を行ったところ、同級生に対するコミュニケーション変化量・先輩に対するコミュニケーション変化量および4月当初の入学意思の標準偏回帰係数のみ有意だった ($F_{[11,167]}=2.04, p<0.05$; 自由度調整済み $R^2=0.06$)。試みに、課外活動の活動量を、第2回調査時における活動時間そのものとして分析を行ったが、課外活動の活動量の標準偏回帰係数は有意とはならなかった。そこで同級生に対するコミュニケーション変化量・先輩に対するコミュニケーション変化量および4月当初の入学意思の3変数のみを説明変数として再度分析を行ったところ、3つの説明変数すべてが有意だった ($F_{[3,175]}=6.34, p<0.01$; 自由度調整済み $R^2=0.08$)。結果を表24に示す。さらに試みに、第2回調査時における仮想的有能感得点から第1回調査時の得点を引いた値を仮想的有能感変化量とし、これを目的変数として再度分析を行ったところ、友人とのコミュニケーション変化量の標準偏回帰係数のみ有意だった ($\beta = -0.23, p<0.01$)。

6-2. 自己肯定感について

自己肯定感についても仮想的有能感と同様に分析を行ったが、すべての説明変数について標準偏回帰係数は有意とはならなかった ($F_{[11,167]}=0.40$; 自由度調整済み $R^2=-0.04$)。試みに、仮想的有能感変化量と同様に自己肯定感についても変化

量を算出し、これを目的変数として分析を行ったところ、同級生とのコミュニケーション変化量の標準偏回帰係数のみ有意だった ($\beta = 0.18, p < 0.05$)。

6-3. 考察

上記の結果から、同級生や友人・先輩といった比較的同世代の他者との関わりが自己意識に変化をもたらす可能性が示唆された。仮想的有能感に関しては、同級生や友人のような上下関係があまり意識されない他者との関わりが低下することによって、わずかに仮想的有能感を高める可能性が示唆された。3-7. で述べたように、今回の調査では仮想的有能感が高まる傾向にあったが、それは同級生や友人との親和性が高まったためではない可能性が考えられる。ただ標準偏回帰係数の数値もわずかであること、説明率の値も低いことから、仮想的有能感の変化に影響を与えた要因は別に存在する可能性は否定できない。また4. 項の結果と同様、入学意思と仮想的有能感の程度にはわずかに関連がみられた。したがって、入学当初の本学への志望動機等が少なくとも前期期間中は仮想的有能感に影響を与えた可能性が考えられる。一方、自己肯定感についてはほとんどの変数が影響を与えたとはいえなかった。その中で、同級生との関わりが影響を与えたことは、いわゆる「心の居場所」を感じる事が出来るような他者との関わりが自己肯定感に影響を与える可能性が考えられる。

表 23 コミュニケーション7対象に対するコミュニケーション頻度変化量 (SD)

家族	先生	同級生	友人	先輩	地域の人	バイト・ボランティア の年上
-0.14 (0.81)	-0.13 (1.28)	0.05 (0.66)	-0.04 (0.60)	0.31 (1.19)	-0.19 (1.36)	1.26 (2.02)

表 24 第2回調査時の仮想的有能感に関する重回帰分析結果

	β
同級生に対する コミュニケーション変化量	-0.19*
先輩に対する コミュニケーション変化量	0.16
4月当初の入学意思	-0.21**
自由度調整済み R^2	0.08**

【まとめ】

本研究の目的は、課外活動の状況やコミュニケーション頻度を通して、他者とのかかわり方の違いが自己意識に与える影響を継時的に検討することであった。

調査の結果、仮想的有能感（他者軽視）傾向には、同級生や友人、先輩といった比較的身近な他者とのかかわりが影響を与える可能性が示唆された。このうち、

同級生や友人といった比較的対等な立場の他者とのかかわりは、自己を客観視することにつながり、結果的に現実的な有能感の認識につながる可能性が考えられる。また、年上の中でも先輩のような比較的身近な他者とのかかわりも、ロールモデルとしての他者の認識に伴う自己の客観視につながる可能性を示唆させる。一方で、課外活動への積極性あるいは積極性の変化は仮想的有能感の変化にほとんど影響を及ぼさない可能性が示唆された。本研究における課外活動への参加状況調査は、参加意思の有無や参加時間数といったどちらかといえば量的側面に限られており、どのような参加状況であるのかといった質的側面を調査していない。コミュニケーション頻度との関連から垣間見えるように、どのような他者といかなる関わりを持ったのかという質的側面でのかかわり方の違いが仮想的有能感に影響を与える可能性も考えられ、今後の検討課題としたい。

自己肯定感と諸変数との関係については、ほとんどの分析で明確な傾向がみられなかった。先行研究が示唆するように、基本的に自己肯定感は一貫した傾向があらわれることを示しているのかもしれない。ただ、友人とのかかわり方が自己肯定感にわずかに影響を及ぼすことが示唆された。これが上述してきたように、友人とのかかわりが果たして自己肯定感を「低める」ことにつながるのか、「高める」ことにつながるのかは、今回の研究ではこれ以上の検討ができなかったため、今後の検討課題としたい。

最後に、4月当初の入学意思の強さと仮想的有能感の傾向にわずかに関連がみられた。仮想的有能感が高いことが不適応傾向を示すわけではないが、仮想的有能感の概念から考えると興味深い傾向である。ただ、その傾向はわずかなものであり、不本意入学を含めた入学意思に関する検討はより慎重に考えていく必要があるだろう。

【文献】

- 速水敏彦（著）（2006）． 他人を見下す若者たち 講談社．
- 速水敏彦（2011）． 仮想的有能感研究の展望 教育心理学年報, 50, 176-186.
- 今泉靖子・内山 聡・若松拓也・大木桃代（2007）． 大学生の自己肯定感を高めるプログラムの検討 生活科学研究, 29, 177-188.
- 神原歩・遠藤由美（2013）． 高合意性情報が強制承諾実験における態度変化に与える効果：自己肯定感の維持という観点からの検討 実験社会心理学研究, 52, 116-124.
- 松島るみ（2012）． 対人的自己効力感と友人関係における切替による大学適応感の差異について 日本教育心理学会第54回総会発表論文集, p675.
- 文部科学省（2014）． 学生の中途退学や休学等の状況について（報道発表） 文部科学省（2014年9月25日）
- 仲野好重・桜本和也（2009）． 大学一年生にとっての「自分探し」とは何か？

- ～初年次教育としての自己発見授業とアイデンティティの模索～ 大手前大学論集, 10, 177-195.
- 中下富子・岩井法子・大戸美香・佐藤真由美・久保田かおる・上原美子・宮崎有紀子 (2012). 高校生に対するピアエデュケーション実施前後における自己肯定感の変化 埼玉大学教育学部教育実践総合センター紀要, 11, 109-115.
- 高木邦子・丹羽智美・速水敏彦 (2008). 仮想的有能感と対人関係 (1) —他者軽視傾向と対人感情の変容— 日本心理学会第 72 回大会発表論文集, p36.
- 田中道弘 (2005). 自己肯定感尺度の作成と項目の検討 人間科学論究, 13, 15-27.
- 梅山ひさの・撫尾知信 (2012). 協同学習が児童の社会的スキル及び自己肯定感の向上に及ぼす効果 —協同学習におけるペアグループの構成に着目して— 佐賀大学文化教育学部研究論文集, 17, 1-22.
- 脇本竜太郎 (2013). 大学適応感を予測する新入生研修の継時的評価 心理学研究, 84, 429-435.